

# ロマ社会における女性の立場

村 上 嘉 希

## はじめに

ロマは広く「ジプシー」の名で知られているが、それは差別用語であり、正式名称はロマという。この論文ではまず一般的にロマの女性が非ロマにはどのような目で見られ、どのようなイメージを持たれているかを導入とし、それからロマ女性が実際にロマ社会で担う役割や置かれた立場などについて考察していくことにする。

なお、この論文でとり扱っているロマは、若干の例外こそあれ、ドイツ、東欧を中心としたヨーロッパのロマである。文中におけるロマの呼称は筆者自身による文章はロマで、引用箇所は「ジプシー」で統一されている。対象となっている時代は、ロマの特性がより多く残っているまだ近代化がなされる以前の20世紀前半が中心である。

## 1 ロマおよび、ロマ女性に対するステロタイプ的なイメージ

ロマはしばしば一般的に、何ものにも捉われることなく自由かつ奔放で、文明社会の束縛から解放された自然児である、というふうにいわれる。これはやはり彼らが放浪の旅を続ける民族であるということが原因になっていると思われる。実は彼らの放浪の旅には、元来の故郷であるインドでのイスラム教徒による侵略やヨーロッパの定住者からの迫害などが関係しているのであるが、詳しい事情を知らない人々にとっては彼らの生き方はとかくロマンティックなものに映るのであろう。

ロマがそのようにロマンティックなとらえ方をされるのには、19世紀のヨーロッパにおいてたくさん生み出された、ロマを題材とした音楽や文学や絵画が少なからぬ影響を与えているように思われる。19世紀、特にその前半はロマン主義が興隆した時代である。ヨーロッパの芸術家や

文学者たちは社会の中で果たすべき義務やわずらわしい制約から逃れることを夢見た。ロマの放浪生活はそういった彼らの自由に対する思いを込めるのに格好の題材であり、ロマは自然の中に生きる理想的な人間として賛美された。しかし彼らはロマの置かれた苛酷な状況についてはほとんど知ることはなかった。ロマを芸術的に昇華したのは大きな業績といえるのであるが、そこには無責任な無理解もあったのである。

ロマはこのようにロマンティックな存在として、もてはやされる一方で、それとはまったく正反対に得体の知れない漂泊民として軽蔑された。場合によっては忌むべき犯罪者の集団として恐れられた。このような偏見の目で見られる原因のひとつに彼らが盗みや物乞いを行うということが挙げられる。盗みや物乞いを行うのは子供や女性であるケースが多いのであるが、彼らは社会的に締め出され、他に仕事を行うことができないので、仕方なく盗みや物乞いを行うのである。またこのようなことを行うのは一部のロマたちであって、すべてではないということも付け加えておくべきであろう。

ロマに対する非ロマのイメージはこのように極端に二つに分化したものであるが、それはロマの女性に対してもまったく同じことがいえるのである。

民族学者のアバルナ・ラオはこのようにいっている。

……とりわけジプシー女性は19世紀以来、しばしば放縦な情熱のためのシンボルでもあった。ジプシー女性はたびたび誇り高く、美しく、誘惑的で同時に危険なものとみなされる。何世紀もの間、いくらかのジプシーグループの女性はおそらく彼女らが持たれているこのイメージを特別な生計の立て方（例えば占い）を通じて利用した。それによって定住者側のイメージは強化された。フランスでは役所がジプシー女性の職業について語ってすらいる。つまり占いについてである。多くのジプシーが音楽や踊りを好むこともこのイメージを助長した。疑いなく、ジプシー女性に関するこれらのイメージは多数のヨーロッパの画家や小説家たちによって受け入れられ、ステロタイプの型に加工された。それはたいていはこの偏見のさらなる

流布を促した。それで大多数のヨーロッパ人の意識には二つの極端なイメージが形づくられた。つまり一方は汚く黒い、社会秩序の外部に立っているがゆえに追い払ってもよい、もしかすると追い払うべきですらある、犯罪を行う乞食女。もう一方は男性によって獲物とみなされる神秘的で誘惑的な「ジプシー少女」である<sup>1</sup>。

このようにロマ女性に対するイメージも二極分化していたのである。つまり一方では、ビゼーの『カルメン』に代表されるような情熱的で官能的な、男性を魅惑せずにはおかない美しい女性と、他方では油断のならぬボロを着た、人を欺く物乞い女といったふうにある。これらのイメージはロマ女性のほんの一部分を表しているにすぎないか、あるいは大きく歪められたものであるといえる。ヨーロッパの人々にはロマ社会の実情が分かりにくいという反面、物乞いや盗み、占いや踊りといった仕事はとかく目に触れやすく、強い印象を残すので、なおさらステロタイプのイメージが形成されることとなったのである。ではロマの社会の内情はいかなるものであったのであろうか。

## 2 ロマの社会組織

一般の人々はロマの生きている世界は何の制約もなく、自由で、勝手気ままであるといったイメージを持ちやすいものである。しかし、実際のところ、ロマの社会は定住者の社会に劣らず、決まりごとが多く、組織化されたところであるといえる。人の集まる場所、必ずその集団をまとめ、統制する規則なり、リーダーなりが必要になってくるのはいうまでもないことである。それはロマにおいても例外ではなく、何ものにも束縛されることのない世界というのは一種の幻想であるといっているのではなかろうか。

ロマの社会にも必ずリーダーというものが存在する。それはおうおうにして高い見識を持つ高齢の男性になるようである。ロマの社会は小規模な集団からなっていたり、もっと大きな部族ともいえるものからなっていたり、様々であるが、いずれにせよ、彼が統率の役目を担うのである。有名なロマ研究者であるマルティン・ブロックはこのように記している。

事情はどうあれ、今日も昔も、ジプシーの首長が種族の先頭に立っているということは確かである。首長は数百世帯、支配することもある。ときには、それがたった二十五世帯にしかすぎないこともある。そのような首長は広く土地中を回った経験を持ち、申し分ない性格を備え、「臣下」から十分に信頼されていなければならない。彼は選出される……。

首長の地位は世襲のものではない。もし首長が死んだり、何らかの罪を犯した場合は、人々にそのことは知らされることなく、別の者が選出される……。

首長はひとりで裁き役と指導者と祭司を兼ねている。彼は執行権を持っている。彼の判決に対して控訴はない。彼は流浪の旅を定め、個々の家族に旅とその経路について指示を与える。首長はジプシーの結婚を承認する。彼なしではいかなる結婚も無効となる……。

言及したように、ジプシーは特有の司法を持っている。年の市や馬市の後のジプシー大集会において裁判は執り行われる。会議は秘密とされ、高齢の人たちだけがそれに参加する。違反行為の程度に応じて罰金刑が科せられる。もっとも厳しい刑罰は長期にせよ、短期にせよ、種族からの追放である。孤独はジプシーにとって死よりもつらい<sup>2</sup>。

このようにロマの社会は思いのほか統制されたものであり、秩序立ったものであるということが理解できる。リーダーの持つ権限も極めて強いということもいえる。特に流浪の旅は非ロマの目には気の赴くままに行っているように見えがちなのであるが、実はかなり計画的なものなのである。ヨーロッパの人々によるロマンティックなイメージと実際の姿とのずれがこれだけでもよく分かる。

それでは実際のロマの女性がこのように統制されたロマの社会で、どのような役割を果たしていたのか、そしてどのような立場に置かれていたのかを考察していきたい。まず最初にロマの女性が果たしている役割について言及したい。

### 3 ロマ女性の仕事

ロマの女性に課せられた仕事はその自由気ままなイメージからは程遠く、大変多いといえる。まず彼女たちはほとんどの定住文化の女性たちがそうであるように、育児と家事を行わなくてはならない。炊事や洗濯も彼女たちの責任である。つまり家庭内における仕事をすべて行う義務があるのである。これだけでもかなりの重荷といえるのだが、そのうえ彼女たちは生計の担い手として大きな役割を果たさねばならない。つまり家庭内の主要な稼ぎ手でもあるのだ。以下、クラウディア・マイアー・ホーファーによるブルゲンラントのロマの資料を参考にして、ロマ女性たちが行っている仕事を概括的に述べたい。

まずロマの女性たちが行う主要な仕事として、森や草地での果実の収集が挙げられる。これは目立たない地味な仕事なのだが、ロマの生活を支えていくうえで不可欠なものといっているであろう。これは当然、自分たちの家での需要を満たすだけでなく、集めた産物を売りに出すために行うのである。ロマの女性は幼い子供たちといっしょに収集の仕事に出る。収集するものは当然季節によって変わってくる。春にはスマレやスズランなどを花束にして、街で通りかかった行楽客に売る。秋にはハシバミの実や栗の実を集める。夏は収集の仕事をする女性たちの主な稼ぎ時である。ラズベリーやコケモモやイチゴといった森の果物はたいへんな人気があり、顧客を見つけるのに長く行商する必要はなかった。

ロマの女性はきのこに関しても特別な知識を有し、特にやや年配の女性は月の位相できのこの成長をいいあてることができたといわれている。ロマの女性は良いきのこの取れる場所をけっして明かさず、私的な顧客や小売商人に売った<sup>3</sup>。

収集の仕事を行ううえでもっとも問題なのが冬であった。冬は多くのロマにとってもっとも苛酷な時期といえる。当然何も集めるものがないからである。この時期に一年中、物乞いを行っているロマ以外にも、多くのロマ女性が物乞いをせねばならなかった。特に夫が失業中であつたり、妊娠しているロマ女性は物乞いによって生計を賄わねばならなかった。ロマの女性は通例一人か二人の子供を連れていたり、乳飲み子を

担いで裸足でかけた。これには当然、住民たちから同情をひくための計算が働いているように思える。子供のいないロマ女性の中にはわざわざ他人から子供を借りる者もいるほどであるから、かなり効果的なのだと考えられる。

ロマの仕事の中でもっともその評判を落とす原因になっているのが盗みである。これも主に女性や子供たちが行うのであるが、おそらくロマの意識の中では収集とさほど変わらぬ位置付けになっているのだと思われる。ロマは個人的財産とか所有といった感覚が希薄である。放浪生活の中では必要最小限のものしか持っていけないし、厳しい環境下で互いに分け合い助け合うのが当然という考え方のもとで生きてきたからである。ロマはそもそも蓄えるということができず、手に入れた食べ物でもおよそその日のうちに消費してしまう。こういう考え方であるから、定住文化側の所有物や財産が余り物に見えてしまい、何の罪の意識もなく、盗みを行うことになるのである。しかし彼女たちが盗むのは野菜や果物、洗濯物や衣服といったささいなものに限られ、強盗のような行為はごくまれであったといわれる<sup>4</sup>。

ロマの女性はヨーロッパの人々によってよく、魔術師だといって恐れられたり、神秘的な存在とみなされたりする。それはやはり彼女たちが占いを得意としたことに起因しているといえる。彼女たちはカード占いや手相占いで、未来のこと、例えば結婚、誕生、病気、死などといった事柄を的中させたといわれる。しかしそれは主に素朴で信じやすい農夫たちをうまく操作した結果であるといえるであろう。占いに関するロマ女性の詐欺行為は数多く記録に残っているが、それでも娯楽の少ない農夫たちにとっては良い気分転換であったようだ。

例えばこのような話が残っている。ロマの女占い師が飲酒癖のある農夫に対して、あなたは悪魔に取り付かれているといった。祓い落とすために占い師はたくさんの小麦粉、塩、コショウといった食料品や、婦人物の服などを要求した。彼女は陶製のなべの中に少量の塩や小麦粉、タマネギ、ベーコンなどを入れ、水でいっぱい満たした。ひそかになべの中に鋼鉄製ばねを入れておき、呪文をとなえると、食料品がなべから飛び出すようにしておいた。占い師はいった。悪魔が今、病人から離れ

たが、残りの食品と服は持っていかねばならない。そこで悪魔が踊ったから真夜中に全部埋めなくてはならない<sup>5</sup>。

以上、これはしたたかなロマとだまされやすい農夫、何よりもロマたちが生活に必要なものしか盗まないという傾向がよく表れた話だといえる。

ロマの女性が魔術師であるというイメージを持たれる原因として、もうひとつ、彼女たちが薬の製造に優れていたことが挙げられる。これはロマの重要な収入源であった。ロマは森や草地で長い間生活していたので、当然動物や植物に関する知識が豊富であり、そういった自然の材料を使った治療に詳しかったのである。薬は女性の売り子によって売られ、村人たちの強い信頼を勝ち得ていたようである。それは彼女たちの薬に関する正確な使用説明によるところが大きかったようだ。

例えば、ぜんそくや気管支炎といった病気には蛇やはりねずみの脂が使われた。脂が患者の胸に塗られ、穴だらけの薄用紙がその上に貼られた。

ロマは動物の病気の治療法にも精通していた。例えば牛や豚の炭疽、炭毒といった病気にはクリスマスローズの根が使われた。牛のあごや豚の耳に突き錐で穴が開けられ、二メートルほどの焦げ茶色の根が通される。この効果は動物の体の毒を撲滅するための白血球がたくさんつくられることに基づくと考えられる<sup>6</sup>。

以上、ロマの女性が行っていた仕事の主なものを列挙したが、全体的に見てみると、自然の物を収集し、それをロマ社会の外に出て、売る仕事が目立つ。ロマの男性の方は馬商人や楽師の他に、鍛冶職に代表される手工業を行うことが多かったけれども、男性によって作られた製品を非ロマの人々に売るのも主に女性の仕事であった。これはロマ社会におけるロマ女性の位置づけを考えるうえで極めて重要な要素といえるのではないかと思える。

なぜ非ロマの人々と接触する仕事が主に女性たちに任されているのであろうか。それはまず第一に、非ロマの人々は相手が女性の方が安心し、警戒しないからである。一般的に見て、女性の方が男性よりも体力的に劣ると見られがちであるし、暴力に訴えることはないと考えられるから

である。ヨーロッパの人々の目から見れば、肌が褐色の異民族に対して、警戒するのが普通であるから、抵抗することのできない弱い存在であるとみなされる女性の方が接触しやすいのである。

第二の理由としてヨーロッパの人々は夫が家庭における主な稼ぎ手であるのが当然とみなされる社会で生きているので、女性が行商などを行っているのに対して同情しやすいことが挙げられる。非ロマであれば、ロマ社会においては女性が収入の多くの部分を担っている事情など知らない。ロマ女性がそういった事情を隠し、場合によってはよるべのない身であるように振るまえば、自然と稼ぎも増えるのである。

第三の理由として浄、不浄の問題が挙げられる。多くのロマが女性の汚れについて信じており、それゆえロマ独特の浄、不浄の考え方から逸脱した非ロマの社会との橋渡しの役目を担ってもらおうということである。この女性のけがれについては多く言及する必要がある。というのもそれは、ロマ社会における女性の立場を明らかにするためのキーワードとなるばかりではなく、ロマの独特な世界観を知るうえで良い足掛かりになると思われるからである。

#### 4 ロマ女性とけがれ

民族学者のアバルナ・ラオはこのように論じている。

ジプシー女性は彼女らの社会に関して、オルトナーが文化的一般概念として前提したことを証明する。つまり彼女たちはその社会の中で女性として「自然の領域」に組み込まれる。非ジプシーとジプシーがお互いにグループとして分類しあうのと同じように、女性の多くの様相、特に生物学的な様相は男たちには説明が困難である。いわんや彼らの見方の影響を受けてしまう。特に思春期の開始から閉経期にいたる月経期には、女性は男たちにとって危険でもっとも近寄り難い〔自然〕界と男たち（文化）との間を結合する鎖とみなされる。

（補足であるが、ここでいわれている自然とはロマにとって規制されていない不可解な未知の世界のことであり、文化とはロマ自身の筋



道に従った文化、ロマの常識の範囲内にある規制された世界のことである。(著者)

さらにジプシーの女性が、文化的ではない非ジプシーと持つ接触が制御しづらいものであるという事情もこれに付け加わる。それゆえジプシー女性だけがしばしば集団の有利になるように「自然」のふたつの相を扱うことができる。つまり霊的な世界と非ジプシーの物質的な経済領域とをである。(ここでいう霊的な世界とは魔術や占いを含む不可知な世界のことであろう。もちろん出産なども極めて謎めいた行為なので霊的な世界に属する。そして非ジプシーの物質的な経済領域とは、生活していくために行商などによって接触せざるを得ない、不浄な非ロマの市場のことを指しているのだろう。(一筆者)

自然と文化の二分法はジプシーにおいては女性の儀式的な浄、不浄と関係がある<sup>7</sup>。

男性にとって女性はしばしば謎に満ちたものであり、超自然的な領域に属するものであるといえる。それは非ロマの世界においても同じことがいえるのであるが、古くからの慣習やおきてを守り、唯物論的な思考とは縁のないロマにとってみればなおさらなのではなかろうか。特に出産は新しい命を生み出す行為であるから、謎に満ち、神秘的で、霊的で、場合によっては恐ろしいものであるわけである。さらに出産並びに月経は多量の血が流れるということも忘れるべきではない。血を流す行為が不浄であり、タブーと結びつくという考え方はロマに限ったものでないといえる。

それでは女性のけがれに関する慣習にどのようなものがあるか具体的に例示していきたい。

ロマ研究家のリュウディガー・フォッセンはこのように記している。

世紀の変わり目ごろのイギリスのジプシーに関して、次のように報告されている。産婦たちは出産前の数日、隔離して建てられた出産用のテントに退かねばならなかった。そこで彼女らは大おぼたち

によって面倒を見られる。一方、夫を含めたすべての家族の男性はもう彼女に近づいてはならない。この隔離の期間は三週間から四週間続いた。

別の出典によれば、隔離の期間は子供の誕生後、二、三カ月に達した。この状態はいっしょに教会へ行ったり、あるいは種族でもっとも年を取った男性の儀式的な身振りによって終わらされた。

1900年ごろの南西ドイツのシンティにおいては、母と子は洗礼まで隔離された。出産はできるだけ箱馬車の外でおこなわれねばならない。それは箱馬車の中が狭いことから理解できる。時々、銅細工師のジブシーにおけるように、独自の出産用テントが建てられることもあった。そこではすべてが几帳面に清潔に管理されねばならなかった。隔離の時期が終わったあと、テントとそこにあったすべての家具什器が破壊されたり、燃やされたりした<sup>8</sup>。

このように思いのほか厳格なしきたりが守られているのが分かる。女性の血のけがれに対する神経の使い方は過剰ともいえるほどであり、制御できない不可思議なものに対する恐れのようなものすら感じさせる。この記録の中には教会に行くなどといったふうにヨーロッパ文化の影響を感じさせる要素も若干出てきている。それがロマの伝統的なけがれに対する習慣と混淆しているのもおもしろい現象といえる。

女性の活動に対して規制がなされるのは月経のときや出産のときに限られているわけではない。ロマの女性には日常においても多くの制約がなされる。同じくリュウディガー・フォッセンの著書『ジブシー』から引用したい。

アメリカの文化人類学者、キャロル・ミラーはアメリカのマハワヤ (Machwaya) における調査に基づいて、次のような見解に達した。つまり、女性の体の上部の清潔と見られる部分と体の下部の汚れた部分は徹底して区別される。体の下部、特に性器は、転義で考えて「マリメ」と呼ばれる「汚れ」の根本的な源であり、血と出産の秘密と関連している。この理由から体の上部を洗うのに使う石け

ん、タオル、髭剃り、クシ、洗面器といったものも、口に接触しうる、まくら、テーブルクロス、食べ物の容器、当然食べ物それ自体、といったものも、いずれの場合であっても、女性の体の下部や、ウエストラインの下の服に触れることは許されない。故意にせよ、故意でないにせよ、それに触れた人や物はそれ自体が「マリメ」(汚れ)となる<sup>9</sup>。

その他、ロマ研究家のエンゲルベルト・ヴィティヒはこのように記している。

ジプシー女性によってスカートで触れられたり、たまたまその上をまたがれた食器やグラスは不浄なものとなされ、たとえまだすこぶる新しくてももはや使ってはならず、投げ捨てられねばならない……。女性の服や洗濯物は箱馬車に全く干されないか、あるいは極めて慎重に干される。もしジプシー男性がかすかにでもそれに触れたり、頭でぶつかったりすると、彼は不浄で汚れたものになる。女性の衣服に触れられた食品はけっして食べてはならない<sup>10</sup>。

このようにロマの女性は月経や出産時以外にも厳格な制約を受けており、自分の性的な力の影響で周囲の人や物が不浄とならないよう常に気をつかわなくてはならないのである。このけがれの慣習に対するロマの異常な固執には、とかくあまり衛生的とはいえない環境の中で、伝染病の蔓延を防ぐことも、理由の一つとして関係しているのかもしれない。

ところでヴィティヒの引用の中で女性の衣服が食べ物や食器を不浄にすることが強調されているように見えるが、これには理由がある。もちろん女性の性器が汚れの源であり、それが食べ物や食器を通して口の中に入ってくるのであるから、十分に危険であることは理解できるのだが、ロマがこれほど神経を払うのにはもう一つ理由がある。それはロマの浄、不浄の考え方の根幹を説明するのにも役立つ。すなわちロマは自分たちの体内の清浄にことのほか重きを置くということである。

社会人類学者のジュディス・オークリーは、ロマが身体の内部と外部

を根本的に区別していることに焦点をあて、次のように説明している。以下、引用である。

身体の外側すなわちそと向きの自己は、明らかにまた犯されないように保たれなければならない内部を保護するためのおおいである。身体の内側は、個人個人によって、またグループの団結によってささえられてゆく、外にあらわれない民族自身を象徴している……。

身体の外側の部分（皮膚）は、捨てたかさぶたやたまった垢、大便のような老廃物や毛髪などの副産物とともに、身体の内側に入らなげにふたたび入ってくるようなことがあれば、けがれになる可能性をもっている。これとくらべて、口を通して身体の内側に入ってくるものは、儀式的に清潔なものでなければならない。食物だけでなく、身体の内側への入口であるくちびるに接する食器やナイフ、フォークの類にも、注意が払われる<sup>11</sup>。

オークリーは以上のように説明している。つまり、女性の下半身から流れる老廃物がまたけがれとみなされるわけであり、それが明らかに保たれるべき身体の中へ、間接的であっても入ってくるのが、タブー視されるのは当然のことなのである。なお、このロマの身体の内側と外側の区別は想像以上に広範囲にロマの生活に影響を与えている。以下、オークリーの要約である。

ジブシーは身体の中に入るものを洗うことと身体の外側を洗うことの区別をする。食物、食器、これを拭くための布巾は、手やその他の身体の部分あるいは衣類を洗うための桶で洗ってはならない。ジブシーはよく「ふたつの桶」ということをいうが、食器用と身体を洗うのを区別するのである。食器洗い用の桶が他の用途に使われると永遠に汚れたことになる。

ジブシーにとって不潔となるよごれは目に見えてもよいが、きれいなものからはちゃんと離れていなければならない。たとえ目に見えるところに糞便が落ちていても、なんらショックなものではないが、しかし、それが食物や台所に近いと問題がある。ジブシーは洗濯や排便など

の不浄な活動を台所の設備と結びつけた非ロマのつくった小屋を軽視する。それは非ロマの風習が不潔なものであるという証拠にもなる<sup>12</sup>。

以上、オークリーの要約である。ヨーロッパの人々はしばしばロマはノミヤシラミだらけで汚いというが、ロマの視点から見れば身体の内部と外部の区別ができていない非ロマの方が不衛生であるということが分かる。したがってロマの生活が不潔だといって、援助を行っても、その世界観の理解なしでは、何の意味もなさないのである。

今まで考察してきたように、ロマの女性はその性的な力を抑制するために、常日頃からさまざまなしきたりに従って行動せねばならなかった。これは生きていくうえでかなりの重荷といえるであろう。彼女たちは一般的に肌をあらわにすることはないし、ミニスカートもはかず、足を広げて座ることもない。どれもロマ社会においては危険な行為だからである。マルティン・ブロックによれば、ロマの女性は夫に対しても裸を見せることはないということである<sup>13</sup>。このことからでも非ロマの人々がロマ女性に対して持つ、性的に解放されたイメージから、実際の姿がいかに遠いか理解できるというものである。

## 5 ロマ女性と結婚

ロマの社会はその多くが父権社会であり、女性の地位は概して高くはない。将来、夫となるべき人物を両親が決めてしまい、結婚をしたときも夫の命令に従い、義理の母に与えられた課題を何の不平もいわずにこなす、子供を産むまでは一人前の妻とは認められない。ただしこのような女性の立場は定住の社会においてもしばしば見られる。

ロマの結婚制度の中で特徴的かつ悪名高いものに人身売買の制度がある。つまり花嫁をお金を出して買うわけである。これは今でこそ数は少なくなってきているものの、長く続いてきた伝統である。リューディガー・フォッセンはこの花嫁売買について次のように説明している。

結婚は花嫁の父と花婿の父の理想的な状況でお膳立てされる。花婿の父は仲介人によって花嫁の値段の高さを調べさせる。花嫁のねだんは交渉によって金貨で決められ、そのさいのねだんは氏族の名

声や花嫁の評判（特にその純潔）、家族を養う彼女の能力に拠っている。

名声ある一族の花嫁のねだんは、1975年のアメリカでは2000ドルから5000ドルの間を動いた。花嫁の代金の支払いで両家間の経済的結び付きは強められ、娘の労働力の補償がなされ、それで結婚のしっかりした基礎が置かれる<sup>14</sup>。

このようにロマの女性は結婚においてもたいへんな制約を受けたのである。たとえこのような花嫁売買のケースでなくても、父親を中心として、両親があらかじめ結婚相手を決めてしまうことが多く、少なくとも結婚するには両親と首長の承認が必要であった。

このような状況下では、当然のことながら、恋人がいるのにもかかわらず勝手に結婚相手を決められてしまうケースも生じてくる。これは本人たちにとってすばいたいへんな恐怖であるはずである。そこでロマにはそのことに対応して非常におもしろい風習がある。すなわち花嫁の誘拐である。エンゲルベルト・ヴィティヒはこのように記している。

古い結婚の習慣は現在でもなお、かなり厳格に遵守されている。もし恋人たちが結婚しようとして、二人が夫婦の契りを共に成就することがかなわない場合、例えば両親からあれこれ文句をつけられるのを恐れるといった場合、しきたりにしたがって、彼らはあらかじめ共にナッシェン (naschen) する。すなわち退去したり、駆け落ちすることであり、自分の一族から別の種族へ逃げたり、少なくともしばらく二人きりになるのである。

彼らが戻ってくると、花婿は花嫁の父にすぐに紹介され、彼に娘を卑しめた許しを請わねばならない。一方、娘もまた許しを求めねばならない。最後に彼らはびんたをもらう。それは与える人の心情によって弱くもなるし、強くもなる。

一般的に次のようなことが起こる。恋人たちが戻ると、彼らはまず種族の妻と父のところへ行く。花婿はこの前で次のような言葉をいいながらひざまずく。「立派な父上、あなたの娘を連れていったこ

とを許してください。」今や父親は怒って、平手打ちを食らわし、それと同時に父の祝福を与える。こうして結びつきが確定される。

しかし男性が許しを懇願して、平手打ちを与えられないなら、不確定となる。この出来事は首長に知らされねばならない<sup>15</sup>。

一般的にロマは結婚や、ことに恋愛に関しては情熱的で無制約なイメージを持たれがちだが、組織内の慣習に重きをおくがために、さほど自由ではないことがこれでよく分かる。ロマのように生きていく環境が苛酷であれば苛酷なほど、周囲による圧迫が厳しければ厳しいほど、組織内の秩序や結束を維持するために、おきてに従う必要があるのである。

結婚というのは集団の一単位である家族を形成するための要であるから、重要視されるのは当然である。そのため部外者との結婚も原則として禁じられることになるのだが、ロマの場合、ただ非ロマとの結婚が禁じられているだけでなく、同じ集団の中で結婚が行われる傾向がある。これを同族結婚というが、これはおしなべてどの地方のロマにも見られる現象のようだ。リューディガー・フォッセンはこのように記している。

外部からのあらゆる試練はさらに強い内部への結束をもたらした。

当然の帰結として、このグループの連帯感はある自分のグループ内部の結婚を要求した。(同族結婚のおきて)もしジプシーの娘が非ジプシーと結婚すると彼女は家族の原理を裏切ることになる。彼女は自分の種族を放棄し、それでみずからがロマ社会からしめ出されることになる。多くの著者がいっているが、伝統を意識したジプシーの目には非ジプシーは原理的に不浄であり、その結果、ジプシー女性の非ジプシーとの結婚は彼らをも不浄にする<sup>16</sup>。

今でこそ各地において同化が進み、定住化したロマは非ロマとの結婚に対して寛容であるが、伝統意識の強いロマにおいては追放に値するほどの重罪だったのである。

一般的にロマは結婚における逸脱行為を非常に嫌う。それは非ロマとの結婚ばかりではなく、姦通に関しても同様なことがいえる。そしてや

はり厳しく処罰されるのは男性よりも女性の方である。ジュール・ブロックによればハンガリーにおいては、夫は姦婦に対して何をしてもよく、特に浮気相手が非ロマの場合は、彼女を殺す権利すら持っているそうである<sup>17</sup>。姦通に関する罰は残酷ですらある。括りつけにされて鞭打たれたり、関節を折られたりすることもある。またエンゲルベルト・ヴィティヒはこのように記録している。

以前、浮気はジプシーにおいては今日よりもまれであった。不実な妻は顔を切られること、たいていは鼻を切られることによって名誉を傷つけられた夫によって生涯、印をつけられる。もし相手が結婚していたら、その妻によって同じような脅しを受ける。

ジプシーたちがいうには、もし敵同士の女性二人が出会うと、互いに鬼女のようにつかみ合い、あたり一面に服のきれや髪が飛び、それぞれが金切り声を上げ、他方を切ったり、刺したりしようとするということだ。特に裏切られた妻は女敵に対してこの特徴的なナイフの切り傷を与えようとねらい、それで二人は生涯この決闘でみにくく走りまわらねばならない。

それでも不実な妻が鼻を切り落とされることで罰せられた以前にくらべるとこれはひとつの進歩である<sup>18</sup>。

このように、姦通を行った女性がどれだけ厳しい報復を受けるかが理解できる。ロマの女性は非ロマの人々によってしばしば、情熱的でふしだらなイメージを持たれるが、それはステロタイプ的な錯覚なのである。

ロマの女性は性に対して開放的で、売春婦のようだと評する人もいるが、それは例えば非ロマの人にとかく扇情的に映る踊り子の印象も大きいのであろう。夫に対して貞節を守ることを厳しく義務として課せられているわけであるから、売淫なども普通は起こりえない。もしあるとしてもそれはごくわずかな例外で、何らかの罪を犯してロマ社会から追放された女性などのケースであろう。

これまでロマ社会における女性の役割とその立場について考察してきた。ロマの女性に対しては一般的に二極分化したイメージが持たれ、そ



れは一方が情熱的で官能的な美しい女性，もう一方は油断のならぬボロを着た物乞いというものであるが，このような傾向は現在においてもさほど変わっていない。

実際のロマ女性は行動に多くの制約が与えられ，家庭内の生計の担い手としての重い役割も果たしていた。それにもかかわらずロマ社会においてはさほど高い地位は与えられていなかった。このことからロマ女性の境遇はあまり恵まれたものでないといえそうなのだが，かといって悲惨なものだと言い切ることもできないと思える。確かに表面的には夫が多くの権利を持ち，主導権も彼に属してはいるのだが，しかし生活そのものは妻に依存しているため，事実上は彼女が家庭内の権威であるというケースも少なくない。それにロマは一般的に高齢者を尊敬する傾向があるのだが，それは女性においても例外ではなく，年老いたロマ女性は名誉あるものとされ，集団のメンバーの助言者となるばかりでなく，リーダーの良き相談役となることもある。マルティン・ブロックはこのように記している。

ジプシーの首長と並んで，おのおののジプシーの一隊には種族の母，「フリ・ダイ」(phuri dai) というのが存在する。彼女は種族のしきたりの監督者である。たとえ表面上は実際の種族の頭のように，ほとんど姿を現さずとも，それだけいっそう大きな見えない力を集団内で持っている。彼女は生活のあらゆる状況における助言者である<sup>19</sup>。

このようにロマの社会に母権的な要素を確認することもできる。確かにロマの社会の多くは父権的要素が強いのであるが，それが根本的に父権的なシステムから成り立っているのだとは断言できないのである。それにリュウディガー・フォッセンが指摘しているのだが，ロマには母神崇拜の傾向が見られるのである。ヨーロッパにおいてはおそらくインドが起源であろう「サラ」や「ビビ」や「アナ」といった女性像が崇拜されている。そしてキリスト教に改宗して久しいロマにおいてすら，父なる神やイエス・キリストの役割は処女マリアの崇拜に比較すると影が薄

いということが際立つのである<sup>20</sup>。一般的にロマはキリストよりも母神マリアの方を受容する傾向があるといわれる。これはロマが母なるものいかに重きを置いているかを強く指し示している。

またロマ研究の先駆者として有名なハインリヒ・フォン・ヴリスロキは19世紀の終わりごろにトランシルヴァニアでメルヘンを蒐集しているが、そこでは母権を思わせるメルヘンが目立つ。例えばその中にグリム童話の『いばら姫』と非常によく似た『恋に溺れたまま母』というメルヘンがあるが、グリム童話とは正反対に王女が眠っている王子を目覚めさせ、助けるのである<sup>21</sup>。また他に『みなし子』というメルヘンがあるが、その登場人物はすべて女性である。そこでは多くの召し使いを従えた絶対的な権力を持つ女主人が現れ、最後に主人公の少女を自分の養女とする<sup>22</sup>。このような遺産の相続形態は母系のものであるといえよう。

民間伝承というものには、その語り手すらも忘れてしまったような種族の古い慣習が残るものである。ロマの社会はその基盤においては母権社会であった可能性も指摘できる。

最後に現在においては、ロマの社会では定住者側との同化が進んでいるのもあって、男性の方が経済力のかなめとなり、女性を縛るけがれに関する慣習も以前ほど重要ではなくなっていることを付け加えておきたい。

#### 注

- 1 Rao, Aparna : *Zur Rolle der Frau bei den Zigeunern Vorurteile, Ideale und Realität*. In : Völger, Gisela und Welck, Karin v. (Hrsg.) : *Die Braut* Band II, Köln 1997 S. 652.
- 2 Block, Martin : *Die Zigeuner*, Frankfurt am Main 1997 S. 145-147.
- 3 Vgl. Mayerhofer, Claudia : *Dorfzigeuner*, Wien 1987 ; 2., verbesserte Auflage 1988, S. 101ff.
- 4 Vgl. *ibid.*, S. 108ff.
- 5 Vgl. *ibid.*, S. 125ff.
- 6 Vgl. *ibid.*, S. 103ff.
- 7 Rao, a. a. O., S. 653.
- 8 Vossen, Rüdiger : *Zigeuner*, Frankfurt/M ; Berlin ; Wien : Ullstein 1983 S.

- 245-246.
- 9 Vossen, a. a. O., S. 247.
  - 10 Wittich, Engelbert : *Beiträge zur Zigeunerkunde*, Frankfurt am Main 1990 S. 89-90.
  - 11 ジュディス・オークリー著 木内信敬訳『旅するジプシーの人類学』1986年 晶文社 143-144ページ.
  - 12 同上書, 145ページ以下参照.
  - 13 Vgl. Block, a. a. O., S. 87.
  - 14 Vossen, a. a. O., S. 248-249.
  - 15 Wittich, a. a. O., S. 92-93.
  - 16 Vossen, a. a. O., S. 251.
  - 17 ジュール・ブロック著 木内信敬訳『ジプシー』1973年 白水社 90ページ参照.
  - 18 Wittich, a. a. O., S. 93-94.
  - 19 Block, a. a. O., S. 146.
  - 20 Vgl. Vossen, a. a. O., S. 225ff.
  - 21 Vgl. Wlislöcki, Heinrich von : *Märchen und Sagen der Transsilvanischen Zigeuner*, Berlin 1886 S. 45ff.
  - 22 Vgl. Wlislöcki, a. a. O., S. 53ff.

## Die Stellung der Frau in der Roma-Gesellschaft

Yoshiki MURAKAMI

Man hört mitunter, daß die Roma freie und wilde Naturkinder seien oder umgekehrt : sie seien unheimliche und gefährliche Diebe. Dies ist jedoch ein einseitiger und übertrieben bezeichneter Aspekt. Die beiden extremen stereotypen Image-haften Vorstellungen sind aus einem Mißverständnis entstanden. Die meisten Europäer und Japaner kennen kaum die inneren Zustände der Roma-Gesellschaft. Die Arbeit soll ein

Beitrag zur Korrektur des Image sein. Ich beschränke mich auf die Stellung der Frau, da besonders über sie seit alter Zeit eigentümliche Vorstellungen kursieren. Ich benutzte vor allem deutschsprachige Untersuchungen und Darstellungen aus der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts. Die moderne Roma-Frau bzw. -gesellschaft mag hiervon freilich wieder abweichen.

Die eigentliche Gesellschaft der Roma ist sehr strikt geordnet. Es gibt viele Bestimmungen und Regelungen. Gewöhnlich steht ein Führer an der Spitze eines Clans. Er leitet die Gruppe, ist Richter, Anführer und Priester in einer Person und hat ausübende Gewalt. Er gibt den einzelnen Familien Anweisungen über – wie es damals noch war : – Wanderungen und die Marschroute. Er schließt Ehen und ohne ihn hat keine ehliche Verbindung Gültigkeit.

In einer solchen kontrollierten Gesellschaft haben die Frauen viele Pflichten und gleichzeitig Einschränkungen. Ihre Lage weicht von dem freizügigen Image einer Carmen sehr entschieden ab.

Sie haben die Pflicht, alle häuslichen Arbeiten zu verrichten wie Haushalt, Kinderpflege, Kochen, Waschen und so weiter. Außerdem müssen sie das Brot verdienen. Denn sie sind auch die Haupternährerinnen. Sie sammeln – in damaliger Zeit – die Früchte des Waldes, decken damit einerseits den Eigenbedarf, andererseits bieten sie die gesammelten Produkte zum Verkauf an. Im Winter, wenn es nichts zu sammeln gibt, müssen die Frauen oft bettelnd für den Lebensunterhalt der Familie aufkommen.

Sonst betätigen sich etliche Frauen als Kräuterfrauen oder Wahrsagerinnen. Die von den Männern hergestellten handwerklichen Erzeugnisse zu verkaufen, ist eine weitere Rolle der Frau. Daß vorwiegend die Frauen hausieren, hat seine psychologischen Gründe : Die Käufer sind gegenüber der Verkäuferin eher nachsichtig und bringen ihr mehr Mitleid entgegen.

Noch einen wichtigeren Grund gibt es : den der ‚Beschmutzung‘ des

weiblichen Geschlechts. Denn die Roma glauben an die Beschmutzung der Frau durch ihre Blutung, ob bei Menstruation oder bei Geburt. Da die Nicht-Roma diese Reinheitsvorschriften der Roma nicht kennen und beachten, kann die Roma-Frau sich unter den Nicht-Roma frei bewegen und bildet damit eine Brücke von der Roma zur Nicht-Roma – Gesellschaft.

Allgemein gilt für die Roma das Geschlechtsorgan der Frau als ursprüngliche Quelle der Beschmutzung. Blutung gilt als unrein und Tabu. Die Frauen werden im menstrualen Stadium als gefährlich angesehen und die Gebärenden werden abgesondert. Zugleich gilt die Geburt als ein wundersamer und unbegreiflicher Vorgang. Die Roma halten sie für übernatürlich und etwas Furchterregendes.

Diese Denkweise schränkt die Handlungsfreiheit der Frau ein. Zum Beispiel darf die Frau Geschirr und Essen mit dem Rock nicht berühren. Wenn es doch geschieht, wird alles weggeworfen.

Es heißt mitunter, daß die Roma locker oder unanständig seien. Aber das ist auch falsch. In der Gesellschaft der Roma ist der Ehebruch strikt verboten. Fehlritte kommen selten vor. Allgemein ist die Strafe für die Ehebrecherin schwerer als für den Ehebrecher. Eine treulose Frau wird durch einen Schnitt ins Gesicht, meist über die Nase, von dem Gatten fürs ganze Leben gezeichnet. Sonst wird sie an ein Kreuz gehängt und mit der Rute geschlagen.

Die Roma halten sich an die Endogamie. Deshalb ist der Seitensprung mit einem Nicht-Roma höchstes Tabu. In Ungarn hat der Gatte das Recht, alles gegen solche Ehebrecherin zu tun, auch sie zu töten, mit anderen Worten : weit strenger zu verfahren als bei einem Seitensprung mit einem Roma.

Zusammengefaßt scheint die Stellung der Frauen unfrei und niedrig. Aber die Roma-Gesellschaft ist nicht vollkommen patriarchalisch. Neben dem Führer gibt es bei jeder Gruppe eine Sippenmutter. Meistens ist es die Alte. Sie ist Beraterin in allen Lebenslagen und hat eine große nicht

村上 嘉 希

sichtbare Gewalt. Der Führer bittet sie stets um Rat. So gibt es auch ein matriarchalisches Element in der Gesellschaft der Roma.